様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３４４２５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ０２５５５

研究課題名（和文）世界史教育内容編成論の研究－ＥＳＤの視点に基づく「現代の諸課題」からの再構成－

研究課題名（英文）A Research on Content Organization Theory of World History Education -Restructuring from ''Contemporary Issues'' Based on the Perspective of ESD-

研究代表者
祐岡　武志（Yuoka, Takeshi）

阪南大学・経済学部・教授

研究者番号：００８０２５３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は当初3年間の予定であったが、新型コロナウィルス感染症の影響による2度の研究期間延長により、5年間に及んだ。コロナ禍で、学校現場での実践による検証や世界遺産踏査の機会が限られたことが課題ではあるが、それまでに収集した実践結果に基づき、2022年の著書の公刊で研究成果としてまとめ、世界遺産踏査の成果は世界遺産に関する他の著書や論文として公表した。
　また、本研究の研究成果を踏まえ、ＥＳＤの観点を高等学校の総合的な探究の時間における探究学習と関連付けるとともに、ヨーロッパにおけるビッグヒストリーとＥＳＤを関連付けた教育内容開発の研究へと発展させることとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究は、内容開発研究中心であった世界史教育において、内容編成論研究として一定の成果を公表できたことに意義がある。特に、新たな教育課題として注目される持続可能な社会の実現に向けて、内容面ではＥＳＤの観点から地球的な諸課題を学習し社会参画する資質や能力の育成を目指したことに、方法面では歴史の遡及的探究学習を提案したことに、研究としての意義がある。
　また、世界史教育にとどまらず、高等学校の総合的な探究の時間の探究学習や欧州のビッグヒストリー研究と、ＥＳＤの観点を関連付ける研究に着手したことは、今後の歴史教育研究の視点を広げる可能性がある。

研究成果の概要（英文）：　This research was originally scheduled for three years, but due to the influence of COVID-19 infection, the research period was extended twice, and it extended to five years. The problem is that COVID-19 has limited opportunities for practical verification at schools and world heritage surveys. However, based on the practical results collected up to that point, I compiled them into research results in a book published in 2022, and published the results of my World Heritage surveys as other books and papers on World Heritage.
　In addition, based on the result of this research, I have linked the perspective of ESD with inquiry learning in high school's Period for Inquiry-Based Cross-Disciplinary Study, and developed it into research on the development of educational content that links ESD with European Big History.

研究分野：教育学（社会科教育）

キーワード：世界史教育　ESD　現代の諸課題　カリキュラム開発　探究学習　世界遺産　SDGs　総合的な探究の時間

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究を開始した 2018 年（平成 30 年）は高等学校学習指導要領が改訂され、世界史を含む地理歴史科の科目の大幅な見直しが行われた。そして教育現場では、獲得した知識を課題に則して活用する力を身につけることに対応するため、言語活動の充実化やアクティブ・ラーニングの導入とともに、持続可能な社会の実現に向けて地球的な諸課題を学習し、社会参画する資質や能力を育成することを、より具体化することが求められることとなった。

従前の世界史教育研究では、知識理解から思考判断に重点を置いた研究が一定の成果を収める反面、国が示す地球的な諸課題を取り扱う探究学習の研究は道半ばであり、持続可能な社会の実現を目指す世界史教育の内容編成全体を見据えた研究は進んでいなかった。しかし、研究代表者がグローバル・ラーニングの事例集の分析により、ＥＳＤの観点を導入した世界史教育内容編成論の研究[①]に着手し、世界史教育にＥＳＤの視点を導入する方途として「現代の諸課題」に基づく主題を設定し、現代から過去へ遡及的に探究する学習（歴史の遡及的探究学習）が有効であることを明らかにしていた[②]。

これらの背景から、持続可能な社会の実現を目指す世界史教育内容編成を体系化するために、世界史教育において、いかに地球的な諸課題を取り扱う探究的学習を行い、社会参画する資質や能力を育成するかを明らかにする研究が求められていた。

２．研究の目的

本研究は、学習指導要領が目指す探究型の世界史教育として、ＥＳＤの視点に基づく「現代の諸課題」を軸とした歴史の遡及的探究学習をカリキュラムレベルで体系化するため、学習者の価値観の変容を促す議論の有効性を検証することを目的とした。この目的を達成するため、これまでの研究代表者の研究成果から得られた、ＥＳＤの視点に基づく世界史教育の仮説として、次の３点を設定した。

ア．環境や社会の内容を世界史に導入すること。

イ．「現代の諸課題」を設定して教育内容とする主題史で構成すること。

ウ．現代から遡及する探究的な教育方法を用いること。

ＥＳＤの視点を世界史教育に導入する際には、上記の仮説アよりＥＳＤの３領域である「環境」「経済」「社会」を基盤とし、仮説イより３領域と関連付けた「現代の諸課題」に基づく６つの世界史教育内容を設定する主題史で構成する。これをカリキュラムモデルとして体系化し、2018 年度までに開発した単元や実践の状況を整理したものが、次の表１である。

表１　ＥＳＤの視点を導入した世界史のカリキュラムモデルと単元の開発・実践状況

領域	現代の諸課題	世界史教育内容	単元	単元の開発・実践状況
(1)環境	①資源・エネルギー問題	資本主義と資源の利用	・近代日本の産業発展	開発中（研究発表 2016）
	②環境問題	自然環境と人類の生活	・産業革命と環境破壊	実践済（研究論文[③]）
(2)経済	③南北問題	産業革命と第三世界	・産業革命とアフリカ	実践済（研究論文[④]）
	④自由・民主化の問題	市民革命と経済発展	・アジアの独立と経済発展	実践済
(3)社会	⑤人種・民族問題	国民国家と民族運動	・先住民とその文化	実践済
	⑥平和と安全の問題	東西冷戦と地域紛争	・中東世界の宗教対立	実践済（研究論文[⑤]）

※ ①③⑥は、本研究において各領域で着目する単元　　（研究代表者作成）

表１では「(1)環境」→「(2)経済」→「(3)社会」の領域順にカリキュラムを編成する。これにより、単元は「現代の諸課題」で示した①～⑥の順に学習を進める。また、各単元は仮説ウより現代から遡及する探究的な学習方法を用い、そのためのＥＳＤ教材として世界遺産を用いる。世界遺産は過去から現在までの世界史的文脈に位置付けられるため、歴史を遡及的に探究する学習の教材として、未来に向けた持続可能性に着目するように、学習者の価値観を変容させることが期待できる。

３．研究の方法

本研究では、これまでに研究代表者が開発した世界史教育内容を、表１の①～⑥の「現代の諸課題」を軸とするＥＳＤの視点に基づく世界史教育の仮説に則した単元として再構成するとともに、(1)～(3)の各領域から１つの単元(①・③・⑥)に着目し、世界史教育の仮説に基づいた実践分析を行うことで、ＥＳＤのカリキュラムモデルの有効性を検証する。

そのための世界史教育の仮説に基づく研究方法は、次の４点からなる。

A．ＥＳＤのカリキュラムモデルの「現代の諸課題」に基づく単元の開発と改善を行う。

B．「現代の諸課題」と関わる世界遺産を教材化し、その意義を実践から分析する。

C．「現代の諸課題」を主題とした議論を行い、学習者の価値観の変容を実践から分析する。

D．実践分析から、「現代の諸課題」を軸としたＥＳＤのカリキュラムモデルを検証する。

Aでは、表１で示した①～⑥の「現代の諸課題」に基づく世界史教育内容から、「①資源・エネルギー問題」の単元「近代日本の産業発展」を開発し、開発済の③の単元「産業革命とアフリカ」及び、⑥の単元「中東世界の宗教対立」の内容を改善する。

Bでは、Aで開発・改善する単元と関連する世界遺産の踏査による情報収集を行い、その成果をもとに世界遺産を教材として組み込み、その単元の実践を分析する。

Cでは、単元①・③・⑥に組み込んだ持続可能な社会の実現を目指す議論の実践記録から、学習者の価値観がどのように持続可能性を優先する方向に変容したのかを分析する。

Dでは、BとCの実践分析による成果と課題からカリキュラムモデルを再構成し、仮説であるＥＳＤのカリキュラムモデルの有効性を検証する。

４．研究成果

以下に、研究年度別の研究成果を示す。

(1) 2018 年度（平成 30 年度）は、上記の研究方法AにおけるＥＳＤのカリキュラムモデルの「現代の諸課題」に基づく単元の開発と改善の研究として、「環境」領域の「①資源・エネルギー問題」の単元「近代日本の産業発展」を開発し、2018 年 6 月に高等学校２校（奈良県立登美ケ丘高校（現、奈良県立国際高等学校）、奈良県立法隆寺国際高校）において授業実践を行った。2019 年２月には登美ケ丘高校において総合的な学習の時間課題研究発表会に出席し、ＥＳＤにかかる生徒発表についての講評を行った。

研究方法Bにおける「現代の諸課題」と関わる世界遺産を教材化し、その意義を実践から分析する研究の一環として、8 月下旬から 9 月上旬にかけて、産業革命に関わるイギリスの世界遺産（マンチェスター、リバプール等）の踏査による資料収集を実施した。

学会での活動については、2018 年 8 月 18 日に奈良教育大学で開催された日本ＥＳＤ学会に実行委員として参加し、発表者の発表準備の補助と参加者の誘導を行った。分科会ではＥＳＤを主題とした発表から知見を得るとともに、ＥＳＤの研究者・実践者と情報交換を行った。11 月 3 日には、奈良教育大学で開催された日本社会科教育学会第 68 回全国研究大会に参加し、大会実行委員として大会運営に関わるとともに、ＥＳＤや世界史教育に関する資料収集を行った。2019 年 2 月 9 日から 10 日に兵庫教育大学で開催された社会系教科教育学会第 30 回研究発表大会に参加し、研究方法Cにおける「現代の諸課題」を主題とした議論を行い、学習者の価値観の変容を実践から分析した成果を、自由研究発表「ＥＳＤの「環境」領域からの世界史教育内容開発― 単元「近代日本の産業発展」を事例として ―」において報告した。

また、これまでの研究成果を博士学位申請論文として兵庫教育大学大学院へ提出し、2019 年 2 月 23 日に学位申請論文公聴会を開催して博士論文を公表することで、関係する研究者や実践者に対して研究成果発表を行った。

(2) 2019 年度（令和元年度）は、ＥＳＤのカリキュラムモデルの有効性を検証するため、2019 年 6 月に奈良県立登美ケ丘高校で、総合的な探究の時間とＥＳＤのカリキュラムモデルを関連づけた特別講義を行った。また、研究方法Aにおける①の単元「近代日本の産業発展」の改善と研究方法Cの実践分析のため、9 月に奈良県立法隆寺国際高校で授業実践を行った。さらに、11 月には奈良県立登美ケ丘高校で「グローバルな視点から日本の鎌倉時代を考える」の授業実践を行った。

研究方法Bにおける「現代の諸課題」と関わる世界遺産を教材化し、その意義を実践から分析する研究の一環として、8 月下旬から 9 月上旬にかけて、民主主義と産業革命に関わるフランスとベルギーの世界遺産（パリ、モンサンミッシェル、ブリュージュル等）の踏査による資料収集を実施した。

学会での活動については、2019 年 6 月 15 日から 16 日に椙山女学園大学で開催された日本国際理解教育学会第 29 回研究大会に参加し、自由研究発表において、「市民的資質の育成に向けた世界史教育－新旧学習指導要領の特質に着目して－」の研究発表を行い意見交換するとともに、情報収集を行った。8 月 3 日には、金沢学院大学で開催された日本学校教育学会第 34 回大会に参加し、自由研究発表において「総合的な探究の時間における探究課題設定－現代的な諸課題とＥＳＤの関連付けに着目して－」を発表した。2020 年 2 月 22 日から 23 日に岡山理科大学で開催された社会系教科教育学会第 31 回研究発表大会に参加し、主に高等学校日本史、世界史に関する発表から知見を得るとともに、情報収集を行った。

また、これまでの研究成果を研究論文としてまとめ、2019 年 12 月、社会系教科教育学会誌『社会系教科教育学研究』第 31 号に「ＥＳＤの「環境」領域からの世界史教育内容開発－単元「近

代日本の産業発展」の授業分析を通して－」を公表した。

(3) 2020 年度（令和２年度）は、表１に示した①～⑥全ての単元の改善に向け、学校現場での調査や学会参加、新たな世界遺産踏査による情報収集を行う予定であったが、昨年度末からのコロナ禍のため、９月までの学会が中止・延期となり、学校現場での調査や夏期の世界遺産踏査を含めた研究活動を見送らざるを得えなくなった。しかし、新学習指導要領で地理歴史科に新設された科目である歴史総合にＥＳＤの観点を導入する内容開発研究に着手するとともに、実践済みのデータに基づき、研究方法Ｄにおけるカリキュラムモデルの検証を行った。

10 月以降は、学会がオンラインで開催されることとなり、10 月に全国社会科教育学会、11 月に日本社会科教育学会、2 月に日本 ESD 学会と社会系教科教育学会に参加（いずれもオンライン）し、主に ESD や SDGs、世界史教育に関わる発表から知見を得るとともに、シンポジウムから情報収集を行った。また、2021 年 3 月には、奈良県立国際高校の教員研修で、ESD と SDGs に関わる講演とワークショップを実践し、高等学校現場におけるＥＳＤに基づくカリキュラム開発に関する教員の意識調査を実施した。

成果発表としては、これまでのＥＳＤと世界遺産教育や地理歴史科教育に関わる研究を論文としてまとめ、2021 年３月、『阪南論集』人文・自然科学編 第 56 巻２号に「世界遺産を教育に活用する一方策－学校教育と生涯学習を視点として－」を公表し、同じく 2021 年 3 月に共創型対話学習研究所『未来を拓く教育実践学研究』第 5 号へ「転換期に対応した地理歴史科教育の創造－現代的な諸課題に着目した「歴史総合」の提案－」を執筆した。

(4) 2021 年度（令和 3 年度）も継続するコロナ禍のため、学会は全てオンラインでの実施となり、引き続き学校現場での調査や夏期の世界遺産踏査を含めた研究活動は見送らざるを得なくなった。しかし、ＥＳＤの観点を導入する歴史総合の内容開発研究では、単元を開発することで具体化するとともに、研究方法Ｄのカリキュラムモデルの検証を進め、その結果の公表に向けて研究成果をまとめた。

学会での活動については、６月に国際理解教育学会、8 月に日本学校教育学会、10 月に全国社会科教育学会、11 月に日本社会科教育学会、2 月に社会系教科教育学会に参加（いずれもオンライン）した。また、2021 年 5 月と 8 月には、奈良県の県立高校の教員研修で、ESD と SDGs に関わる講演とワークショップを合計３回実践し、WWL コンソーシアム構築支援事業に関わる高等学校現場の探究的な学習とＥＳＤに関する教員の意識調査を実施した。

成果発表としては、2021 年 10 月、日本学校教育学会国際交流委員会編『国際交流と学校教育グローバル時代を共に生きるために』へ「ＥＳＤの観点を導入した高等学校歴史教育内容開発－歴史総合の単元「危機遺産と現代の諸課題」を事例として－」を公表し、同じく 2021 年 10 月に『阪南論集』人文・自然科学編 第 57 巻第１号に「ＥＳＤの 3 領域に基づいた総合的な探究の時間における探究課題の設定－「現代的な諸課題」と SDGs の ESD との関連性に着目して－」を執筆した。そして 2022 年 2 月には、これまでの研究成果をまとめた著書『世界史教育内容編成論研究－ＥＳＤの観点からの再構成－』を公刊した。

(5) 2022 年度（令和 4 年度）は、所属大学の研究制度により１年間オランダのアムステルダムに滞在し、アムステルダム大学の Esther Quaedackers 氏の支援の下で客員教授としてビッグヒストリー教育の研究を進めた。これは、これまでに明らかにした世界史とＥＳＤの関連付けを基盤に、ビッグヒストリーとＥＳＤを関連付けた教育内容開発を目的とし、ビッグヒストリーに関する国外の研究や実践を明らかにすることにある。そして、オランダを拠点とした欧州でビックヒストリーや世界遺産に関する資料収集を行い、探究的な学習とＥＳＤの研究を深めることに取り組んだ。

学会等での活動は、いずれもオンラインで開催された６月の日本国際理解教育学会、7 月と 9 月の European Big History Network、8 月の日本学校教育学会、10 月の全国社会科教育学会と日本社会科教育学会、11 月の日本 ESD 学会に参加した。2 月には、社会系教科教育学会で「地球市民意識を育成する探究的歴史教育の研究 －オランダのビッグヒストリー教育に着目して－」を主題としたオンデマンドによる自由研究発表と、日本学校教育学会国際交流委員会のオンラインによる研究会で「ヨーロッパの学校教育と文化－オランダの窓を通して－」の発表を行った。

成果発表としては、2022 年 11 月に、日本学校教育学会国際交流委員会編『学校教育を軸とした多様な国際交流　グローバル時代を共に生きる』へ「総合的な探究の時間と ICT の活用に関する考察 －WWL コンソーシアム構築支援事業拠点校の取り組みを事例として－」を公表した。また 2022 年 12 月には、『見る・知る・考える　明治日本の産業革命遺産』に「もっと深く知るために 広げる！感じる！世界遺産！！」を執筆した。そして 2023 年 2 月には、『地理・歴史・SDGs の視点でひも解く 日本の世界遺産 全 3 巻』の歴史的分野とイラスト SDGs コラムを執筆した。

本研究は当初 3 年間の予定であったが、新型コロナウィルス感染症の感染拡大による 2 度の研究期間延長により、5 年間に及ぶものとなった。コロナ禍の影響で、学校現場での実践による検証や世界遺産踏査の機会が限られたことが課題ではあるが、それまでに収集した実践結果に基づき、2021 年度末の著書[6]の公刊で研究成果をまとめるにいたった。

さらに、ＥＳＤの観点を高等学校の総合的な探究の時間における探究学習の課題設定と関連

付けることで、歴史教育における探究学習の研究への示唆を得ることができた。また、世界遺産の教材開発のための世界遺産踏査の成果は、世界遺産に関するいくつかの著書や論文として公表することとなった。地理歴史科の新設科目である世界史探究にかかる内容開発まで着手できなかったことは課題であったが、オランダにおけるビッグヒストリー教育の研究が 2023 年度からの科研費支援事業に採択されたことで、本研究の研究成果を踏まえ、現行世界史の新設科目における探究的な教育内容開発研究へと継続・発展させることとなった。

＜注＞

① 祐岡　武志、「ＥＳＤの観点を導入した世界史教育内容編成論－グローバル・ラーニングのカリキュラムフレームワークの分析より－」、『グローバル教育』、第 16 号、2014、52－66

② 祐岡　武志、「ＥＳＤに視点を置いた世界史教育内容編成－「現代の諸課題」に基づく歴史の遡及的探究学習の提案－」、『教育実践学論集』、第 19 号、2018、177－190

③ 祐岡　武志、田渕五十生、「国際理解教育としての世界遺産教育－世界遺産を通した『多様性』の学びと学習者の『変化』－」、『国際理解教育』、第 18 号、2012、14－23

④ 祐岡　武志、「理論批判学習としての高校世界史授業開発　１．理論批判学習の授業開発と実践－「産業革命とアフリカ」を事例に－」、『教育実践学としての社会科授業研究の探求』、梅津正美・原田智仁編、風間書房、2015、73-89

⑤ 前掲論文②

⑥ 祐岡　武志、『世界史教育内容編成論研究－ＥＳＤの観点からの再構成－』、阪南大学叢書 121、風間書房、2022

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 祐岡武志	４．巻 1
２．論文標題 総合的な探究の時間とICTの活用に関する考察 －WWLコンソーシアム構築支援事業拠点校の取り組みを事例として－	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『学校教育を軸とした多様な国際交流　グローバル時代を共に生きる』日本学校教育学会国際交流委員会編	６．最初と最後の頁 59-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 祐岡武志	４．巻 1
２．論文標題 ESD の観点を導入した高等学校歴史教育内容開発－歴史総合の単元「危機遺産と現代の諸課題」を事例として－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『国際交流と学校教育　グローバル時代を共に生きるために』日本学校教育学会国際交流委員会編	６．最初と最後の頁 104-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 祐岡武志	４．巻 第57巻第1号
２．論文標題 ESDの3領域に基づいた総合的な探究の時間における探究課題の設定－「現代的な諸課題」とSDGsのESDとの関連性に着目して－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『阪南論集』人文・自然科学編	６．最初と最後の頁 57-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 祐岡　武志	４．巻 第56巻２号
２．論文標題 世界遺産を教育に活用する一方策－学校教育と生涯学習を視点として－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 阪南論集　人文・自然科学編	６．最初と最後の頁 53-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 祐岡　武志	４．巻 第5号
２．論文標題 転換期に対応した地理歴史科教育の創造―現代的な諸課題に着目した「歴史総合」の提案―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 未来を拓く教育実践学研究	６．最初と最後の頁 46‐59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 祐岡武志	４．巻 第31号
２．論文標題 ＥＳＤの「環境」領域からの世界史教育内容開発－単元「近代日本の産業発展」の授業分析を通して－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 社会系教科教育学研究	６．最初と最後の頁 31-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 祐岡武志
２．発表標題 地球市民意識を育成する探究的歴史教育の研究 －オランダのビッグヒストリー教育に着目して－
３．学会等名 社会系教科教育学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 祐岡武志
２．発表標題 ヨーロッパの学校教育と文化－オランダの窓を通して－
３．学会等名 日本学校教育学会国際交流委員会
４．発表年 2023年

１．発表者名 祐岡武志
２．発表標題 市民的資質の育成に向けた世界史教育－新旧学習指導要領の特質に着目して－
３．学会等名 日本国際理解教育学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 祐岡武志
２．発表標題 総合的な探究の時間における探究課題設定－現代的な諸課題とＥＳＤの関連付けに着目して－
３．学会等名 日本学校教育学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 祐岡　武志
２．発表標題 ＥＳＤの「環境」領域からの世界史教育内容開発－単元「近代日本の産業発展」を事例として－
３．学会等名 社会系教科教育学会第30回研究発表大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 祐岡　武志
２．発表標題 世界史教育における内容編成論の研究－ＥＳＤ（持続可能な開発のための教育）の観点からの再構成－
３．学会等名 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科学位申請論文公聴会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計3件

1．著者名 岩下哲典、藤村泰夫、祐岡武志、他9名	4．発行年 2022年
2．出版社 勉誠出版	5．総ページ数 264
3．書名 見る・知る・考える　明治日本の産業革命遺産	

1．著者名 岩本 廣美、河本 大地、祐岡 武志、赤星 信太朗、青山 邦彦	4．発行年 2023年
2．出版社 帝国書院	5．総ページ数 221
3．書名 地理・歴史・SDGsの視点でひも解く　日本の世界遺産　全3巻	

1．著者名 祐岡 武志	4．発行年 2022年
2．出版社 風間書房	5．総ページ数 246
3．書名 世界史教育内容編成論研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関